

2019年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集案内

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。

(A) ジェンダーフォーラム論文賞	
対 象 : 学部学生・大学院生(個人・団体)	提出書類 : ①ジェンダーフォーラム論文賞申込書* ②論文(日本語2万字以内の未発表論文)
支給額 : 優秀:10万円、佳作:5万円	備 考 : 執筆にあたってはジェンダーフォーラム「年報」投稿規定に従うこと。
採用件数 : 1~4件	
選考方法 : 論文審査	

書類提出期間 : 2019年10月1日(火)~2019年10月31日(木) 窓口閉室時まで

書類提出先 : 学生部学生厚生課(池袋)・学生部学生厚生課(新座)・独立研究科事務室

採用発表 : 11月25日(月) 学生部学生厚生課(池袋) 奨学金掲示板、学生部学生厚生課(新座) 奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定

授与式 : 11月末~12月上旬(予定)

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】
 標記の申込書(願書)で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。
 以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー:立教大学における個人情報の取扱いについて」(<http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/privacypolicy.html>)に準じる。
 ※(B)活動・研究助成金の募集は終了しました。
 詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
 ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp
 *申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課(池袋)、学生部学生厚生課(新座)、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

2019年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金B授与者決定!

2019年度前期に行われた(B)活動・研究助成金には5件の応募があり、2019年5月13日に開催された選考委員会において、3件に助成金を授与することを決定いたしました。また、授与者には、6月3日に開催された授与式にて、片上平二郎所長より奨学金が授与されました。選考結果は下記のとおりです。

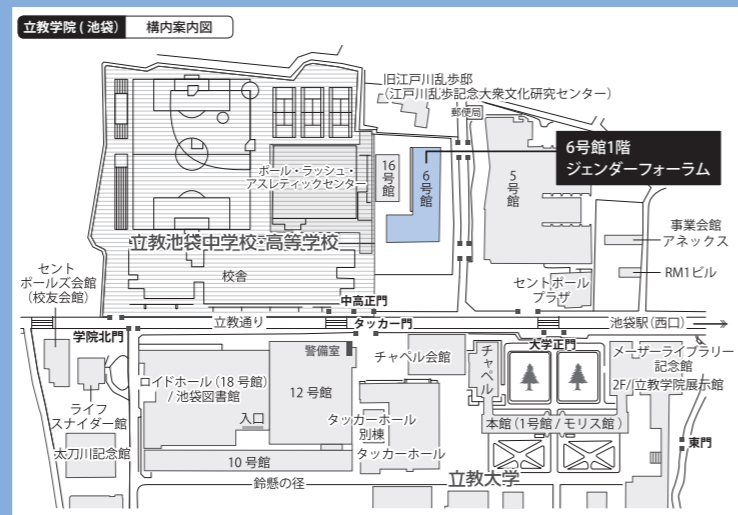
ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(B)活動・研究助成金選考結果

奨学生氏名(所属)	タイトル	支給額
中田 麻理(文学研究科フランス文学専攻博士後期課程4年)	「ジャン・ジュネにおける「男らしさ」をめぐって—戦争、身体欠損とセクシュアリティ」	10万円
萱場 千秋(文学研究科英米文学専攻博士後期課程1年)	「Go Down, Moses における南部農園の経済と黒人女性の倫理」	5万円
諸岡 友真(文学研究科英米文学専攻博士後期課程1年)	「James Baldwinの小説における愛の政治性についての研究」	5万円

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」とはならず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

開室日 : 毎週月曜日~金曜日
 開室時間 : 10:00~16:00
 場所 : 立教大学池袋キャンパス6号館1階
 TEL&FAX : 03-3985-2307
 E-mail : gender@rikkyo.ac.jp
 URL : <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>



詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPをご覧ください。

GEM

Vol.41 2019.10.1
Rikkyo Gender Forum News Letter



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味するGender Equality in the Makingとし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

ジェンダーフォーラム20周年記念映像について

立教大学ジェンダーフォーラムが創立20年を迎えるにあたって、1年にわたって関係者の方々インタビューを収録し、ジェンダーセッションやコーヒーアワーの様子を撮影させていただいています。立教の一員になって3年目の私は、初めてこのフォーラムの存在を知り、その活動を目の当たりにしました。コーヒーアワーは、学生も立教だけでなく外部から様々な立場の方が参加して率直に語りあえる優しくも対話が思考を刺激する素敵な場になっていました。ある参加者は、「ここで出会った人が、私の人生を変えてくれました」と笑顔で語ってくれました。こうした場が長く続いてきたのも、フォーラムの立ち上げから、今に至るまでその目指す理想を多くの人たちが受け継いで来られたからでしょう。昨年末のジェンダーフォーラム20周年記念公開講演会で収録した、庄司洋子先生とかつて職員として立ち上げにあたった元立教大学職員の松井明子さんの言葉からも途切れることなくフォーラムを支え続ける強い気持ちと流れを途切れさせない工夫を重ねてきたことを知ることができました。この後は、ミッチェル奨学金の受賞者と向き合い、ジェンダー研究者を育成してきた新田啓子先生の言葉を追加して、ジェンダーフォーラム20年の映像記録をご覧くださいと思います。



宮本聖二(本学21世紀社会デザイン研究科特任教授)

ジェンダーフォーラム10周年を記念して刊行されたのが『立教ジェンダーミニ事典』。2009年3月に刊行された42ページの小冊子です。所員・運営委員を中心に本学でジェンダー教育にあたっている18名の教員が、それぞれのこだわりを押し出し、ジェンダーの視点から個別具体的な対象を見開き2ページで論じました。いくつか項目を拾うと、「かぐや姫」(小嶋菜温子)、「カンフー映画」(新田啓子)、「ディズニー文化」(豊田由貴夫)、「エコフェミニズム」(萩原なつ子)など。たしかにこの事典には雑多な内容の面白さがありますが、体系的に欠けており、物足りなさも残ります。

20周年を記念する事業はどういうものか。10周年時と比較して、ジェンダーやフェミニズムに関する初心者向けの書籍は数多く出版されています。そこで映像作品がいいのではないかと漠然と思っていたところ、萩原なつ子先生(当時副所長)から、NHKの元プロデューサーで、21世紀社会デザイン研究科に新しく着任する宮本聖二先生を紹介していただき、一挙に映像記録の制作が実現する運びとなりました。

手前味噌ですが、ジェンダーフォーラムの航跡をたどることを通じて、ジェンダー教育・研究の初心を問う作品に仕上がりました。ジェンダーフォーラムの創設に深く関わった職員の方の貴重な証言の記録にもなっています。2019年度中に視聴していただけるよう準備を進めています。ご期待ください。

和田悠(ジェンダーフォーラム前所長/文学部教育学科准教授)

第 77 回ジェンダーセッション (2019 年 5 月 20 日 (月))

アメリカのオギノ式：1930 年代の「自然な」避妊法の導入をめぐる郵便・宗教・産児調節運動の様態

登壇者：横山美和氏 (立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託)

本セッションでは、20 世紀前半アメリカにおける「オギノ式」の社会的受容に関する報告がなされた。横山氏の研究は、オギノ式の受容について、教会のみならず産児調節運動や郵便を含むより広い社会的範囲への影響に目を向けたものである。

1924 年、荻野久作は月経周期の長さに関わらず排卵のタイミングを推測できる学説を発表した。この学説が避妊へと応用、世界的に広まるのにさして時間はかからなかった。アメリカでもまた、リズム法という名で広く受け入れられるに至った。

さて遡って 19 世紀後半、筆者の乏しい知識だと、アメリカが著しい産業化と経済成長を経験した時代、そして依然として厳格な性規範が存在した時代であろうか。通称「コムストック法」と呼ばれる「卑猥」と認定されたものの取引、郵送を禁じる連邦法が制定された。そして、横山氏によると、「卑猥」なものの中には避妊具や避妊に関する情報まで含まれており、同法やその関連法は、20 世紀に現れた米国産児調節連盟の設立者マーガレット・サンガーをはじめとする産児調節運動家らにとって大きな障害になっていたという。

このように産児調節に関するものや情報が「卑猥」と認定され、物理的に流通を抑制されていた中、唯一リズム法やそれに関わる情報は例外的扱いを受けることになる。カトリックは生殖目的ではない性交を罪としてきたのだが、「子どもができないときに性交しても罪ではない」と解釈された教皇ピオ 11 世の回勅 (1930 年) に端を発したリズム法に関する書籍出版 (1932 年)、コンシップカレンダーというリズム法カレンダーの輸入と米国特許取得 (1934 年)、そしてそれらの販売と郵送の容認 (あるいは黙認) といったかたちで、リズム法

は浸透していくことになる。

リズム法に関わるものだけは宗教上、法律上、問題化されないという奇妙な状況で、産児調節運動家たちはどう反応したのか。横山氏は歴史的資料に基づき、彼女たちの一様ではない反応を明らかにしている。具体的には、先のサンガーと、保守的な風土を持つマサチューセッツの産児調節連盟に注目し、前者は怒り、そして後者は母親の健康クリニックでリズム法を教え始めるなど便乗したということを示した。

会場はほぼ満席であり、フロアからは様々な学術的視点からの質問があり、活発な質疑応答が行われた。確かアメリカの歴史的な文脈に言及した質問が出たと記憶しているのだが、私自身も本原稿を執筆する中で、上記の事実がより広い、19 世紀後半～20 世紀前半の同国の交通・通信網の発達や性規範の変化、それらの地理的差異の中で、どのように解釈できるのだろうかという関心を抱くに至った。横山氏は同時代のアメリカの科学史とジェンダーの専門家であり、素人の私が言うまでもないが、大きな社会情勢と関連づけた議論に発展することを期待したい。

おりしもアラバマをはじめとするアメリカの複数の州の中絶の規制強化と反中絶キャンペーン、それらに対抗する Pro-choice 派の動きが大きく報道された時期であった。女性の生殖の権利が危機に晒される中、改めて先人らの足跡を丁寧な追ひ、大きな社会への影響を分析する、本研究のような試みが必要とされているのではないだろうか。

太田麻希子 (本学社会学部現代文化学科准教授)

第 78 回ジェンダーセッション (2019 年 7 月 29 日 (月))

女性像からみる原爆映画：スター・ヒロインと被爆者像の交錯

登壇者：片岡佑介氏 (立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託)

毎年 8 月になると、テレビでは戦争 (特にアジア・太平洋戦争) 関連の特集番組が多く放送されている。日本において、降伏文書に調印がなされた 9 月ではなく 8 月に敗戦が特に取り上げられる背景として、天皇による玉音放送の存在、盂蘭盆会という死を想起させる仏教行事などがあげられるが、同時に広島・長崎への原爆投下という大量殺戮の経験も無視できないであろう。今年 (2019 年) は NHK E テレにおいて、広島原爆投下を描いた映画『ひろしま』(1953) が放映されたほか、それに先立って『ひろしま』の製作過程を取り上げたドキュメンタリー番組が放映された。そこで強調されていたのは、「被爆者自らが演じる」ことで表現される「迫真のリアリズム」である。

この作品について、「社会問題としての原爆」という一般的な社会・政治的批評とは異なり、ジェンダーという観点からその形式に着目したのが、片岡佑介氏による今回の講演である。片岡氏の講演は、『原爆の子』(1952) と『ひろしま』という同じ原作をもとにしたふたつの作品を中心に、原爆映画にみられるジェンダーについて考察するものである。片岡氏によれば、原爆映画批評は社会・政治的批評に偏りがちであり、それが依存する「形式」には注目が集まりにくい。原爆映画も、商業的作品であれ、『ひろしま』のような非商業的な作品であれ、「ジェンダー化された被爆者像」という形式からは逃れられない。

新藤兼人監督の『原爆の子』では、乙羽信子演じる女教師が「モダンな女性」と「理想的な母親」という 2 つの役割を見事に演じることによって、「純粋な被害者」というイメージを情緒的に印象づける

ことに成功している。「白いブラウスの女教師」や「白血病の少女」といったジェンダー化された形式に大いに依拠することにより、原爆による日本の被害者性が強調されている。もう一方の関川秀雄監督『ひろしま』は、『原爆の子』にみられる情緒的要素を排し、よりドキュメンタリー的な作品を志向する形で製作されたものである。しかし、描き出されるイメージは異なるものの、「白いブラウスの女教師」や「白血病の少女」を活用することで、やはり「無垢なる被害者」像を構築している。

戦後日本の戦争イメージは、「唯一の被爆国」ということもあり、「無垢なる被害者」のイメージで語られることが多かった。片岡氏も指摘するように、原爆は戦後日本のアイデンティティ形成に大きな役割を果たしていると言える。その原爆イメージの形成において、ジェンダー化された形式が大いに影響している。メディアの如何を問わず、原爆表象はたいてい社会問題の観点で語られる。しかし、形式に着目することで、これまでの戦争イメージに新たな光を当てられるのではないだろうか。片岡氏の講演は、そのような気づきを提供するものであった。

松岡昌和 (本学アジア地域研究所特任研究員)

2019 年度全カリ紹介

2019 年度の秋学期に、ジェンダーフォーラムが提案した全学共通カリキュラムのコラボレーション科目「現在形の文化活動から考えるジェンダー論」が開講されます。このコラボレーション科目は、立教大学の専任教員が 1 名、兼任講師が 1 名、さらに各回のゲスト講師が 1 名と、原則的に 1 回の授業に 3 人の講師が関わるという非常に豪華なコマとなっております。多彩なゲスト講師のみなさんを毎回お招きして、多様な立場からジェンダーについて語っていただき、幅広い視点を受講者に身につけてもらうことを目標に授業設定を行っています。

今年度のテーマは「現在形の文化」です。小説や演劇、映画、写真、漫画、ジンなどのカルチャーに関わる方々にゲストに来ていただき、自らの表現や活動の中でどのようにジェンダーという問題と触れあっているのかということについてお話ししていただくと思っています。「文化」や「表現」は、日常の中でつい見過ごしてしまうような些細な問題を繊細に拾い上げ、かつ、素朴な「正しさ」という感覚だけでは提示できないような視点でそれについて考えることを可能にする力を持つものです。この授業では、そのような「文化」の持つ可能性の力

を借りて、ジェンダーについて考えていきたいです。

授業の前半 7 回分では、演劇批評家の山崎健太さんに兼任講師として力をお借りします。山崎さんは最新の演劇の動向をふまえつつ挑発的に言論を展開する批評家です。後期 7 回ではライター・翻訳家の野中モモさんに兼任講師を担当していただきます。野中さんは、自主制作出版物オンラインショップ「Lilimag」を運営し、また制作者同士の交流のためのイベントを定期的に主催してもいます。常に「新しい」表現者たちを見出そうとしているお二方の視点から見て、魅力的な表現者たちをゲストにお招きして授業を展開していきます。

担当するわたし自身もどのような授業になるのかとても楽しみです。多くの学生のみなさんとこのワクワク感を共有していきたいなと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

片上平二郎 (ジェンダーフォーラム所長 / 社会学部社会学科准教授)